

認知地図に基づく東京の山の手と下町の範囲

長谷川 玲央

本学地理・環境専攻 2014年3月卒業

I. はじめに

東京には都区部を中心に山の手・下町といった、町名や区名などの行政区分上には存在しない通称の広域地域が存在する。このような地域が行政区分と異なるところは、その範囲が明確に画定されておらず、また、いつからその呼称が使われ始めたのかを断定することが難しいということである。

山の手と下町の分類は地域区分的な役割以上に、東京都区部を二つの地域に大別する際には無視のできない概念であると考えられる。それは、それぞれの地域イメージがしばしば対照的なものであると扱われるからである。山の手は武家屋敷を端緒とした、文化的で「お高くとまった」イメージで語られるのに対して、下町は江戸時代から受け継がれてきた町民の伝統や「粋」を代表するような江戸っ子的なイメージを今に残している。このようなイメージは歴史的に見ても場所と結びついてきたもので、今日までの人々のもつ地域概念としての山の手・下町は東京内部のイメージの重要な構成要素を担ってきたことは否定できないだろう。

しかし、山の手と下町は地域イメージとしての呼称であるため、人によってその範囲も異なっていると考えられる。そして、前述のとおり山の手・下町は近世よりの歴史をもつ地域名であるが、その範囲も時代によって変化している。つまり、山の手と下町は通称であるが故に流動的な地域であり、最新の研究に意義があると考えられる。

そこで本論では現在の東京における山の手・下町が一般的に人々にどのような範囲で認知さ

れ、その中でどこが山の手・下町の中心的地域なのか、また認知される山の手・下町の範囲は居住地の認知地図で差異が見られるのか、そして、どこにそれらの境界があるのか、ということをも鉄道駅名を指標とした白地図により、歴史的な背景も含めて明らかにする。また、その上で現在も変化しつつある山の手・下町の姿を年代別の認知度による等値線図より考察する。

本研究は通称の広域地名である山の手と下町を対象とするが、両地域はイメージ上の地域であり、また、分析方法としては認知地図を用いるため認知地理学的一端であると言える。地理学におけるイメージの概念については内田(1987)に詳しく、内田は環境としての地理的空間に対するイメージを場所イメージとし、それは、「ある主体がある場所に対して思い描く心的内容の全て」と定義している。個人の場所イメージの中でも社会集団で共通する場所イメージは社会的な場所イメージとされ、それはステレオタイプ化されやすい反面、画一化されたイメージゆえに記憶されやすく、地名や場所と短絡的に結び付けられやすいものと論じた。

認知地理学の初期の研究としては『都市のイメージ』(リンチ 2007)が挙げられる。リンチは一定のグループに共通するイメージをパブリック・イメージと定義し、パブリック・イメージは5つのエレメント(パス、エッジ、ディストリクト、ノード、ランドマーク)に分類できると説明した。

認知地図による地域イメージの研究としては内田(2000)の研究が挙げられる。内田は「伊豆」の範囲を地元住民及び観光客からの手書き

の認知地図により明らかにし、「旧伊豆国」としての伊豆ではなく、観光戦略として作り出されたイメージ上の「伊豆」の存在を示した。

山の手・下町のイメージについての地理的な研究について山鹿(1977)は山の手・下町イメージの成立から定着、現在までの拡大する過程を記述し、1977年時点での調査では山の手と下町の範囲を区(または町名・地区名)単位で行った。その結果、山の手・下町イメージの範囲は旧山の手・旧下町の外方へ延び、一種のドーナツ型を形成していた。また、若い年齢層ほど外方への指向が強かった。これは都心部のビル化に伴う現象で、山の手と下町という名称は人間の居住地の中心と印象づけられ、ビル街はそのどちらでもないためと結論付けられた。

II. 山の手と下町の歴史的概要

本章では本研究の主題となる東京の俗称地名山の手と下町についての歴史的概要を記述する。山の手・下町の語源について、江戸幕府が編纂した地誌『御府内備考』によれば、下町は江戸城の膝元つまり御城下(おしろした)の町であるから下町と略し、『砂子の残月』という幕末の書によれば、「山の手は山の里(て)たるべし」とあるようにその語源ははっきりしていない(竹内他 2010)。

1. 山の手と下町の成立から定着まで

山の手と下町という地域名がいつ頃成立し、その定着に至ったかの経緯は山鹿(1977)に詳しい。山鹿は17世紀後半からの地誌類や小説、随筆の文献から山の手または下町という名称がみられるものを列挙した。その中で、18世紀の享保以降には下町という名称が出現するようになったと記述している。竹内他(2010)によると、山の手が武家屋敷を象徴するのに対し、下町は町人の町という対置的地域概念が江戸時代前期には既に定着していた。花咲(2000)

は江戸時代の山の手を、江戸の高台にある麴町・四谷・牛込・赤坂・小石川・本郷などの広い地域とし、そのほとんどが大名・旗本などの武家屋敷と寺社に占められた土地であったと解説している。また、生粋の江戸っ子にとっての江戸時代の下町の範囲は京橋・日本橋・神田のみであるとも言及している。

山鹿(1977)は山の手・下町の地域名は明治期に入り完全に定着・確立したと述べ、山の手と下町は地形差があるほか、下町は商業地、山の手は住宅地といった機能差があり、それに加えて山鹿は山の手と下町には独特の市民生活、市民意識とそこから生ずる文化の差異がみられたと記述している。

2. 山の手・下町の範囲とはどこか

1) 今日までの山の手・下町の範囲

山鹿(1977)によると下町の範囲は江戸の町人町であった日本橋・京橋・神田を中心に、北は浅草、南は芝辺りまでの隅田川西岸、それに加え川向こうの本所・深川を含める程度であった。それが東京の工業地の成立・発展に伴い東へ拡大、荒川放水路を越え、商工住の混在地域となった工業地は千葉県境の江戸川まで拡大した。一方、山の手は、本郷・小石川・牛込・赤坂などの山手線内、元は武家地であった地域に限られていたが、1923(大正12)年の関東大震災を契機に住宅地は周辺農村へと広がり、中野・杉並・世田谷などの元は郊外地であった地域まで前進、更に西へと住宅地は拡大していった(山鹿 1977)。竹内他(2010)によると江戸時代の下町の範囲は京橋・日本橋・神田が中心であり、それは現在の中央区の大半と千代田区のごく一部を指した。そして、幕末から明治の初めにかけて、下谷・浅草が下町と呼ばれるようになり、大正から昭和の初めにかけて本所・深川が下町の範囲に含まれた。また、竹内他は近年の山の手は範囲に吉祥寺や田園調布が含まれるようになり、山の手は武蔵野台地

の西へ延びつつあると言及している。

山鹿 (1977) のアンケート調査によれば、「お
おむね山の手に属する」という回答の区は明治
期までの山の手である文京・新宿・千代田より
も山手線外方である世田谷・目黒・渋谷・杉並
の方が多数であった。また、下町は隅田川以西
の中央・台東よりも以東の墨田・江東・葛飾・
江戸川がその範囲となっていた。そして、地名
の自由回答で山の手は山手線内の地名が少な
く、下町は浅草が圧倒的ではあるものの、それ
以外は隅田川以東の地名が多かったとある。

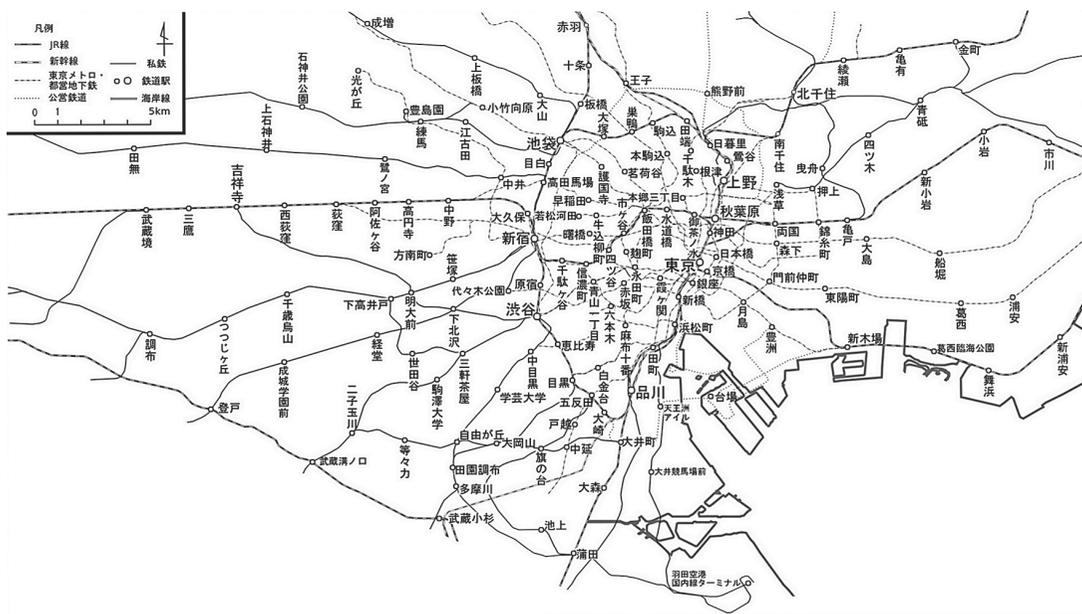
Ⅲ. 調査方法・分析方法

1. 調査方法

今回の分析に使用するデータは、2014年10
月25日から11月3日の内の7日間で行ったアン
ケート調査で得られたものである。アンケート
調査は日中に路上面接法で、東京都区部とその
周辺で行った。具体的な調査地点は10月25日
(土)に新宿中央公園・新宿駅東口前(新宿区)、

10月26日(日)に光が丘公園(練馬区)、10月
27日(月)に天沼弁天池公園(船橋市)・錦糸公
園(墨田区)、10月30日(木)に日比谷公園(千
代田区)、10月31日(金)に九品仏川緑道(目
黒・世田谷区)・大師公園(川崎市)、11月2日
(日)に葛西臨海公園(江戸川区)、11月3日
(月)に東綾瀬公園(足立区)の計10ヶ所で、合
計151のデータを得ることができた。

アンケート調査票では山の手と下町を十分に
内包していると考えられる東京都区部を中心と
した範囲に鉄道駅の位置とその駅名、及び鉄道
路線を表示させた白地図(第1図)上に被験者
が考える山の手と下町の全体の範囲及びそれぞ
れの中心(もしくは中核)となっていると思わ
れる範囲を実線で閉じた形に囲うよう求めた。
範囲の囲み方については描き方の例を提示し、
山の手・下町の囲まれた範囲が複数になること
や、それぞれが隣接・重複してもよいと説明し
た。これに加え、フェイスシートとして被験者
の現住所(市区町村まで)、性別、年齢の回答も
求めた。



第1図 アンケート調査に使用した調査票内の白地図

山の手と下町の範囲を明らかにするにあたって、鉄道（駅・駅名・路線）を調査の指標とした理由は、それらが人々のもつ都市のイメージに強く影響しているのではないかと推測したためである。リンチ（2007）のパブリック・イメージを構成する要素の一つであるノードとパスまたはエッジはそれぞれ鉄道駅と鉄道路線に当てはまる。

2. 分析方法

回答から得られた描線データの中には囲われた範囲の一部が閉じられていないものも見られたが、補完できると判断したものに関しては筆者が不自然でない程度に補完を行った。また、描線の範囲が白地図（第1図）の範囲外まで及び回答や白地図中の端まで描かれず途切れてしまっていた描線に関しては、筆者がそのその末端部に点線を加え、それを回答とみなした。囲まれた範囲について、山の手・下町の記載のないものや、内部に独立した除外領域を指定した例外は無効とした。

このようにしてアンケート調査で得た151の描線データの中から有効と判断したのは141だった。筆者はこれらの描線データを一件ごとに第1図にトレースした。次にアナログデータであるこの描線データを統計的に見るために、地図上の鉄道駅の位置が山の手・下町の範囲に「含まれる」か「含まれない」かのカテゴリデータとしてカウントした。その上で、山の手・下町に含まれるケース数が同各カテゴリ全体のケース数に対して占める割合（%）を山の手・下町の認知度とし、この認知度を元に等値線図を作成した。

IV. 居住地による認知地図の特徴

今回のアンケート調査で得られたデータより、居住地については東京都区部を城西地域（練馬区・中野区・新宿区・板橋区・杉並区・

豊島区）、城東地域（江東区・足立区・江戸川区・墨田区・荒川区・葛飾区・台東区）、城南地域（大田区・品川区・世田谷区・渋谷区）の3地域に、その周辺部を都区部外西部地域（東京都区部外・埼玉県・神奈川県）と都区部外東部地域（千葉県・茨城県）の2地域、合計5地域に住所の記載のあった139名分のデータをカテゴリ分けし、データごとの各鉄道駅地点の認知度を基に等値線図を作成した。

本章ではトレース、カテゴリ分けした描線データから居住地による差異が見られるのではないかと見込んだ山の手または下町の範囲を等値線図化した。図中の数字は%で、等値線は10%ごとの表示である。また、本章以降では等値線10%までを認知されている範囲として扱う。

今回用いる城西・城東・城南地域のカテゴリ分けは筆者が便宜的に自動車登録番号標の交付地域を参考にした。それぞれが練馬・足立・品川ナンバーの交付される区にあたる。

本章以降、文献より挙げられた山の手・下町に属する地名と、今回の調査で用いた白地図内の鉄道駅の位置は多少のずれが生じると考えられるが、本論ではそれらをほぼ同一の地域にあるとみなす。

1. 城西・都区部外西部・都区部外東部地域の住民の山の手（全体）の認知の比較

第2～4図はそれぞれ城西・都区部外西部・都区部外東部地域の住民の回答より作成した等値線図である。まず、共通する事項として、全体的な形は主にJR山手線に沿っており、それ以外は南西方向への伸びも見られる。70%以上山の手だと認知された中央の範囲がJR山手線にあることがわかる。

本節で注目するのは10～30%程度山の手だと認知されている東急沿線（図中では自由が丘・大岡山・田園調布・多摩川駅など）である地図中南西部の地域である。第2図では東急沿線方面へ広がり30%台までであるのに対して、



第2図 城西地域(練馬区・中野区・新宿区・板橋区・杉並区・豊島区)の住民の山の手(全体)の認知度による等値線図 $n = 36$

第3図と第4図はそれぞれ20%、10%台と第2図よりも山の手だと認知されていない。つまり、これらは居住地に近く身近な地域であるため山の手イメージがより多くもたれていたのではないと思われる。

2. 城西・城東・城南地域の住民の下町(全体)の認知の比較

第5～7図は順に、城西・城東・城南地域の住民の回答より作成した認知度を表す等値線図である。まず、全体的な等値線の形状として、70%まではおおそ南北に延びる同心円の形状となっており、それ以下の範囲は東へ向かう傾向が強いようである。また、等値線西側はJR山手線付近にかけて大きく減衰している。等値線の中央部は浅草・両国駅周辺で、いずれの地域住民も80%以上がここを下町だと認知している。

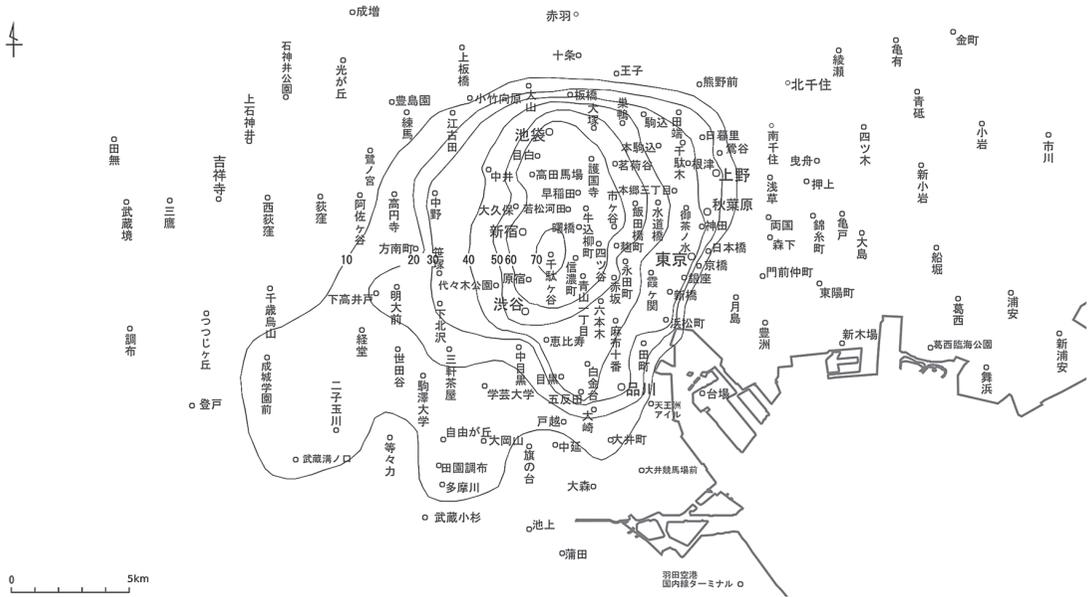
第5図は他2地域と比較しても全体の広がり小さい。西北西の指向が強く、北東・南東方

向へは若干それが弱いことが分かる。西北西方向へは駒込駅が30%台(第6図は20%、第7図は10%台)で10%の等値線が板橋駅まで到達している。この西北西に延びる地域は城西地域の住民にとって近接性が高かったか、それに伴う地名・場所の認知度が高かったのではないかと考えることができる。また、城西地域の住民の認知度について、江戸時代の下町(京橋・日本橋・神田(竹内他 2010))の認知度が城東・城南地域の住民よりも低く、日本橋駅と神田駅においては20%台であった(第6図ではそれぞれ50、40%台で第7南図は両方40%台であった)。つまり、城西地域の住民にとっては城東・城南地域の住民よりも元来の下町をあまり下町だと認知していないことが分かる。ここから城西地域の住民にとって下町があまり身近ではないと見る事ができる。

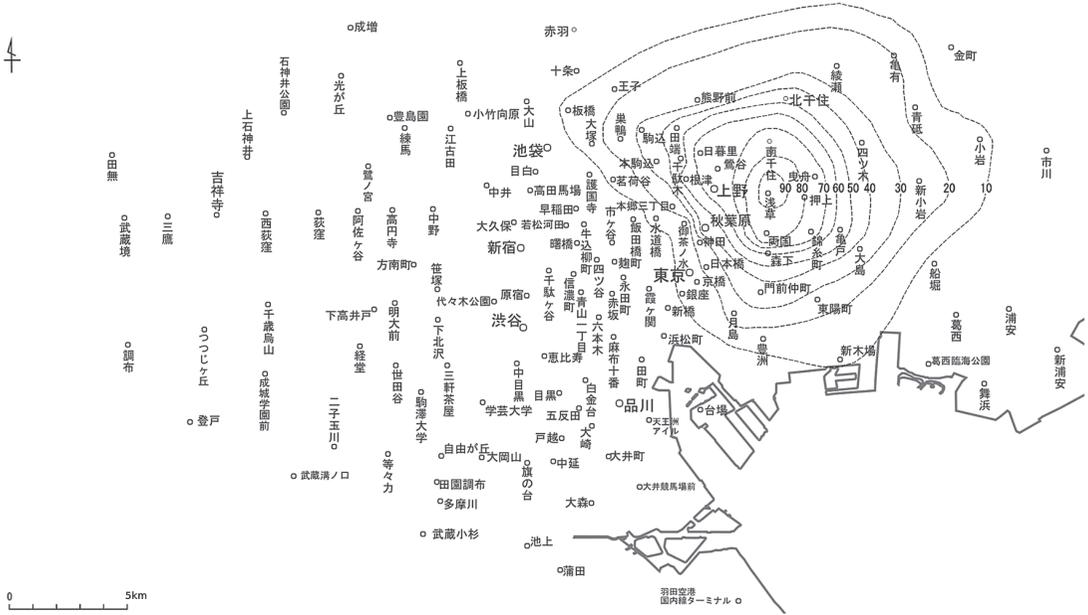
第6図は城東地域の住民の認知する下町(全体)の等値線図である。全体的な特徴は第5・7図と比較すると浅草・両国駅間を中心として北



第3図 都区部外西部地域（東京都部外・埼玉県・神奈川県）の住民の山の手（全体）の認知度による等値線図 $n = 20$



第4図 都区部外東部地域（千葉県・茨城県）の住民の山の手（全体）の認知度による等値線図 $n = 23$



第5図 図城西地域(練馬区・中野区・新宿区・板橋区・杉並区・豊島区)の住民の下町(全体)の認知度による等値線図 $n = 35$



第6図 城東地域(江東区・足立区・江戸川区・墨田区・荒川区・葛飾区・台東区)の住民の下町(全体)の認知度による等値線図 $n = 39$



第7図 城南地域（大田区・品川区・世田谷区・渋谷区）の住民の下町（全体）の認知度による等値線図 $n = 21$

東に延びていることである。つまり、下町の認知はより居住地の方向へ強く影響していると考えられる。金町駅や小岩駅までが20%以上の範囲に収まっており、また、南東・南西への伸びも第5図より広い。

第7図は、城南地域の住民の認知する下町（全体）の等値線図である。第5・6図と比較すると、10%以上の範囲がもっとも東へ延び、千葉県である市川駅や新浦安駅の範囲まで到達している。この点は第6図の城東地域の回答のように居住地に起因していないように思われる。第7図のもう一つの特徴として、西方向への伸びが大きいことが挙げられ、江戸時代の山の手（麴町・四谷・牛込・赤坂・小石川・本郷（花咲 2000））の内、麴町・四ツ谷・小石川（白地図上には記載はないが若荷谷駅の南西部に隣接）が10%に、本郷が20%以上の範囲に含まれている。つまり、1～2割程度の人には元来の山の手だった場所が下町と認識されているということである。これについては第5図の場合と

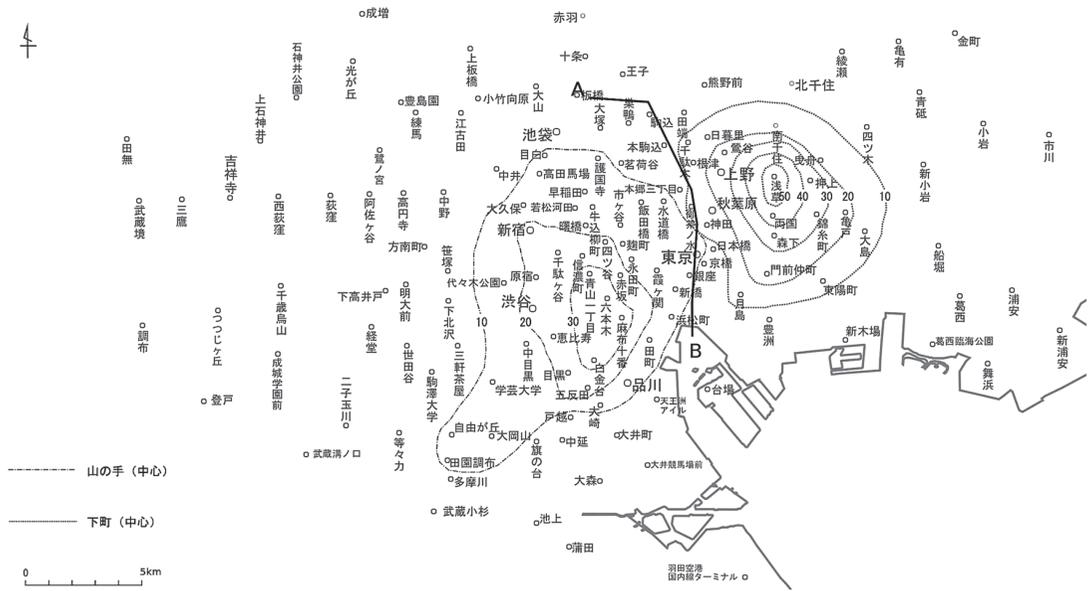
同じように居住地への指向性とも見ることができなくはないが、第6図とあまり差が無いとも言える。

以上のことから、山の手・下町が認知される範囲には若干の差があり、少なからず居住地の方向へ影響もあるようだ。しかし、それは地名そのものの認知度の違いが大きく関わっているのではないかと考えられる。本研究の対象がある程度広がりをもった地域（周辺を含む都区部地域）だったため、居住地によって認知される範囲に若干の差が出たのは当然の結果だったのかもしれない。

V. 今日における山の手と下町の範囲

1. 全データによる山の手・下町（全体・中心）の認知地図の特徴

第8図は今回の調査で得られた全描線データ（山の手・下町（全体））を重ねた認知地図である。一見すると山の手（全体）の範囲はJR山手線の輪



第11図 全データの山の手・下町(中心)の認知度による等値線図と山の手・下町の境界線
 山の手 $n = 132$ 下町 $n = 134$

世田谷区の西部から東部にかけて10~20%程度の認知度であった。また、竹内他(2010)によると近年の山の手範囲に吉祥寺や田園調布が含まれるようになったとあるが、田園調布駅は22.7%だったのに対し、吉祥寺駅は3.5%であった。このことから吉祥寺はほとんど山の手であると認知されていないことが分かった。等値線東部へ目を向けると、江戸時代の下町(京橋・日本橋・神田(竹内他 2010))も10%以上の範囲に含まれている。

山鹿(1977)のアンケート調査によれば山の手範囲は明治期までの山の手である文京・新宿・千代田区よりも山手線外方である世田谷・目黒・渋谷・杉並区の方が多数派であったとしている。ところが、第10図の結果では、中心部はそれらの区のおよそ中間の地域であり、認知された山の手範囲の内10~20%以上の範囲を除くと、旧山の手側へも新山の手側へもおよそ同心円形の広がりをもっていると言える。しかし、山鹿の調査は行政区の単位で行ってお

り、このことが合致しないのは当然だったのかもしれない。また、この結果はJR山手線上に回答された描線が多かったことを留意しなければならない。つまり、東部への広がりや元来の下町をも含んでいたことは、これが要因だと見ることができる。

2) 下町(全体)の等値線図

一方の下町の範囲は山の手とは違い、路線にあまり影響されておらず、最も認知度の高かった浅草・両国駅周辺を中心とした同心円状の等値線が30%まで広がっている。20~10%の範囲は北東・北西へ金町駅や王子駅までの広がりが見られた。10%以上の等値線までには前項の江戸時代の山の手の内、茗荷谷駅(小石川)と本郷三丁目駅が含まれている。また、前項の江戸時代の下町は神田駅・日本橋駅が共に40.0%で、京橋駅が29.3%であった。つまり、元来の下町も3、4割近くは下町と認識されていた。山鹿(1977)はアンケート結果より、下町の認

知される範囲は隅田川以東が多数であったとしている。今回の調査結果より山鹿の主張の通り、隅田川以東への広がりはやや強かったが中央から認知度30%の等値線まで（中央から約5km弱）は同心円的に広がっていくことが分かった。竹内他（2010）は、浅草が下町と呼ばれるようになったのは幕末から明治の初めにかけてだとしている。つまり、元来の下町だった場所である京橋・日本橋・神田から中心部が東方向に移動していたということは間違いなかったようである。

3) 山の手と下町の境界

次にこれらの境界を具体的に示すため、両等値線図の同認知度の交点を結び（第10図のAB間）、筆者はこれを本研究における山の手と下町の境界線とみなした。境界線は北端がほぼ板橋駅付近で、そこから東南東へ進み、駒込駅の東部から御茶ノ水駅まで南下、東京駅と銀座駅の間を抜けて東京湾に到達する、およそJR山手線の東半分に沿う形となった。また、同認知度の交点の最大は30%の等値線であった。30%の交点付近の御茶ノ水駅は約3割の人から山の手または下町と認知されることになる（ちなみに、御茶ノ水駅は神田駿河台にあり、神田駿河台は大名と旗本の屋敷地だった（花咲 2000）ため、山の手に属することになる）。

本節1・2項で挙げた、江戸時代からの元来の山の手・下町はそれぞれ、境界線により西側と東側に分けられる形となった。つまり、第10図の境界線ABより、江戸時代から今日まで、元来の山の手・下町はその境界線をほぼ保っていると言ってよいだろう（かつての下町である芝地域（山鹿 1977）は山の手側に位置し例外となった）。

第11図は山の手・下町（中心）の認知度による等値線図で、全体的には第11図の範囲の中心部を指し示す結果になった。第11図と同じように境界線ABをおいたところ、両範囲の

10%の末端部がおおよそ境界線と重なった。つまり、中心的な山の手・下町のイメージにおいても境界はこの付近であると言える。

3. 年代別の等値線図による山の手・下町の認知の比較

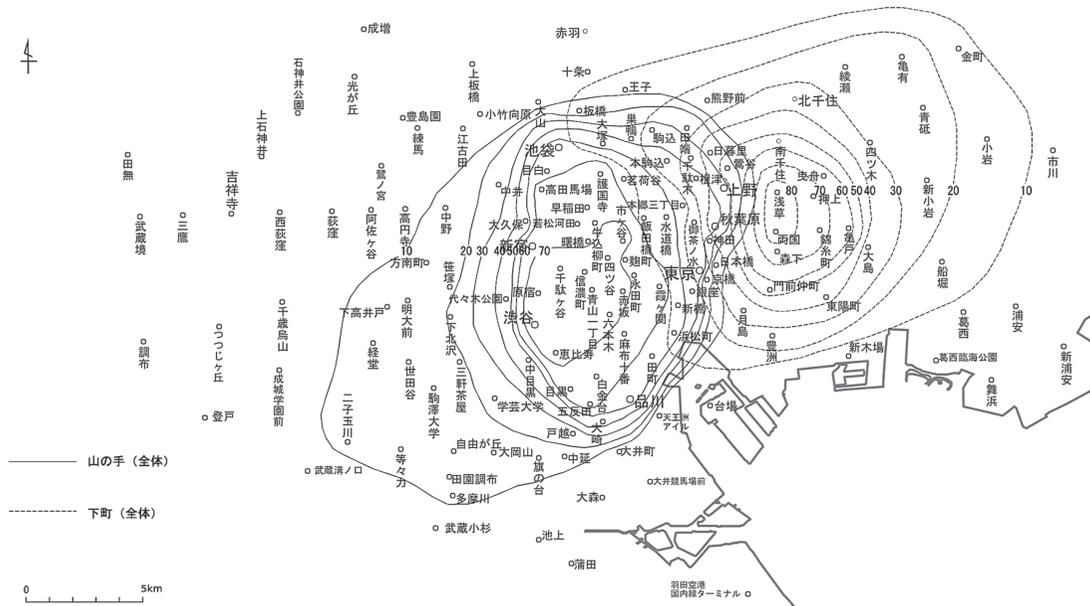
本章第1節で第8図中の描線がJR山手線に集中したことから、被験者の多くは「山の手」のイメージを「山手線」の意味合いで捉えたのではないかという筆者の仮定を検証するために、年代別に山の手・下町（全体）の等値線図を作成し、これらを比較する（第12・13図）。それぞれ10～30代（10代：13.2%、20代：42.6%、30代：44.1%）と50～70代（50代：42.0%、60代：36.0%、70代：22.0%）の等値線図である。

下町の範囲はあまり大きな差異は見られなかった。しかし、山の手について、第12図ではJR山手線に強く影響を受けた分布になっており、下町との重複の度合いも大きい。一方の第13図は第12図よりもJR山手線の影響が弱く、西方向へはそれが顕著である。つまり、10～30代は50～70代よりも「山の手」＝「山手線」というイメージが強い傾向にあることがわかる。このことから、若年層にとっての山の手はJR山手線であるという認識に変化しつつあり、山の手と下町は一組の地域イメージではなくなっていると考えられることができる。

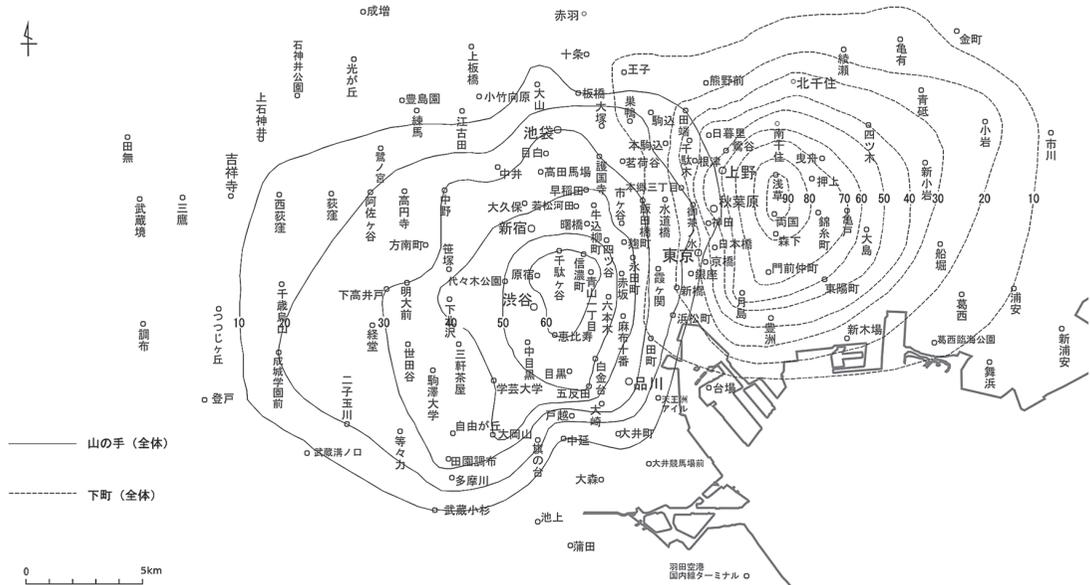
VI. 考察・結論

本研究の目的のひとつであった居住地ごとの山の手・下町の認知の違いについて、多少の指向性と差異は見られたものの、扱う範囲が広域であったため、それぞれの居住地ごとで周辺に対する認知が作用していただけたとも考えられる。

次に、一般的に認知されている山の手・下町は全データの認知度による等値線図（第10図）で示した通りで、下町は浅草駅を中心におおよ



第12図 10~30代の山の手・下町(全体)の認知度による等値線図
 山の手 $n = 68$ 下町 $n = 67$



第13図 50~70代の山の手・下町(全体)の認知度による等値線図
 山の手 $n = 50$ 下町 $n = 50$

そ同心円状の広がりをもち、東は千葉県まで達していた。山の手はJR山手線南西部を中心に西へ延び、世田谷区南部まで広がっていたが、それ以外の方向はJR山手線に強く影響を受ける形であった。等値線図が同心円状に近い形となった理由としては白地図上に直接書き込む方法をとったため、なるべくしてなったとも考えることができる。つまり、山の手・下町という俗称地名は広域であるがゆえに、認知される境界が曖昧、もしくは、山の手・下町のそれぞれの域内に境界があまりなく、それが要因となって等値線図は第10図のようになったのではないかと考えられる。

筆者が本論で山の手・下町の境界と定めた第10図中の境界線ABも山手線のルートに大きく影響を受けていた。具体的なデータはないが、アンケート調査の際、下町ははっきりと分かるが山の手イメージはあまりはっきりしていないと口にしていた被験者も多くみられた。そして、第8・10図のJR山手線付近への回答の集中から、筆者は山の手・下町のイメージは今日においては一組の対のイメージとして認知されておらず、山の手というイメージは現在では「JR山手線」のイメージに取って代わられているのではないかと仮説を立てた。この仮説を検証するために示した第12・13図では10～30代

の若年層の方が「山の手」を「JR山手線」とみなす傾向が強いことがわかった。つまり、今日の「山の手」は「JR山手線」の意味に取って代わられつつあると見ることができよう。

山の手・下町は歴史的な端緒をもつ、いわば対の地域イメージであったが、本研究で明らかになったのはJR山手線に移りつつある「山の手」イメージであった。このことから、山の手・下町のイメージは現在も徐々に変化し続けていると考えることができる。

参考文献

- 内田順文 1987. 地名・場所・場所イメージ——場所イメージの記号化に関する試論——. 人文地理39(5)、391-405.
- 内田順文 2000. 認知地図にもとづく「伊豆」の範囲について. 国士館大学文学部人文学会紀要(33)、108-97.
- ケヴィン・リンチ 2007. 『都市のイメージ』. 丹下健三・富田玲子訳. 山口昭男、岩波書店.
- 竹内 誠・古泉 弘・池上裕子・加藤 貴・藤野 敦 2010. 『東京都の歴史』. 野澤伸平、山川出版社.
- 花咲一男 2000. 『大江戸ものしり図鑑』. 黒川裕二、主婦と生活社.
- 山鹿誠次 1977. 山の手と下町——都市内部の地域名に関する一考察——. 地理22(9)、132-140.